九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

天理大学附属天理図書館蔵 大隈言道『続草径集』翻刻と解題（四）

進藤, 康子
九州情報大学 : 非常勤講師

https://doi.org/10.15017/25276

出版情報：文獻探究. 49, pp.26-47, 2011-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

天理大学附属天理図書館蔵

大隈言道『続草径集』翻刻と解題（四）

進藤康子

958 月かけにかゝる雲をもたわすれて庭のこのはを払ふさよかせ

959 庭のおもにゆきまとひたる人の影そらよりみたるよすからの月

960 まとの戸の一重のかみも無はかり月あかきよは人もねられす

961 吹かへぬ風のみふきてさくらはなけふもそなたへちる日なりけり

962 吹風のものくるひなる【けを（ホド）】しらてまかする花にいかてしらせむ

963 あらたちてわかゝとたゝく風のうちにまこと問たるこゑのうれしさ

964 のとかなる春のみそらになり〳〵て桃も富たるこのみ也けり

965 よひ〳〵にいくつうつやとねさめしてかそへつゝみ（鼓）は更にける哉

966 人ことにをらまくほしきおもふりにせむすへなきは【主（さくら）】なりけり

967 終夜ものをおもひてはてなきにいとはしけなる犬の長鳴

968 いとおそし月をかくせるそらの雲ひろはかりをはいく夜にか行

969 さかりとてわかみる花のかたはらにいつよりきたる雨風のくも

970 わかゝとのはたに生たるすはりかふ居もならはす【や（て）】いまたをさなき（し）

（四〇・ウ）」

971 けしきよく月をかくさぬ雨ならはそなたにしてもふらせてしかな（カク）

972 よるなみのあさゝをしりて立もせすみなはのうちにあるちとりかな

973 よもすからむるゝ蚊わひてうまやとのあおと聞はわれもねられす

974 かゝらてはならしとおもふ事もなくありのまゝにて在わか世哉

975 ともとなくへもなく（ト）舟のなから川なかるゝまゝのわかみなりけり

976 いかはかり花をさかせはわかやとにちりかひくもるにはをみるへき

977 さくらはなふち山吹とかそふれは春にのこるはわか身のみして

978 けふのみとおもへる時にくはゝれる春しもあらはいかにうれしき

979 さみたれはいへをいている人もな【く】（シ）回こゆるは水にそありける

980 えたゝれてぬるゝはかりのまつ杉のこゝろはしりぬ五月雨の空

981 たゝひとつこのまに見ゆる舟たにもかけなつかしきさみたれのころ（下る）

982 さみたれはくものうちなる瀧つせに山もくつるゝ音のする哉

983 うゑし田のいねのはすゑの見えくれは誰もうれしきさみたれの空

984 おもひつるものみなうれしはるの野のにはつく〳〵しそこはさはらひ

（四一・才）」

985 はなちれはそなたをはるの行へにて外には道のいつれともなき

986 とし〳〵にをらるゝ梅の枝も老ておのかひもちお苔生にけり

987 いつしかももとのさくらになるならんちからなけなる数のひこはえ

988 うのはなのましろき垣にかけしるしこよひなくへき子規かも

989 ほとゝきすはつねきかせよさしもあらは今よりのちは己か随意

990 人きけとなくにあらねは子規まちへぬへきかたくもある哉

991 ほとゝきすなかはなきねと任せてはほこるこゝろやなけにならまし

992 またれてはほこりてなかぬ子規人のこゝろにゝたるものかな

993 をちかたにかけ見えきぬる子規今もなくねのきこえこましな

994 わかやとにまちもあへすて子規やかてよそなる子規かな

995 しのひねとおもひしこゑの子規ちかつくまゝにまさたなる哉

996 わかやとをとくも過れと子規月日の行はさはかりはなし

997 ほとゝきすつれなしなとゝうらむれとさるこゝろこそ人におほけれ

998 子規かす〳〵おほきこゑのうちにはつこゑ計はなくはましらす

（四一・ウ）」

999 まけたるもいとゝかたきを子規ありあけの月に見るつかひかな（ナ）

1000 まてはなくときもありしを子規こゝろなしとはいかてしつへき

1001 よひ〳〵に一こゑつゝの子規ねをこらすともかすはしれけり

1002 子規そなたになかはねつゝきに今もとひこん山もとのさと

1003 妻やなき山子規いつも〳〵あと追【かけ（トリ）】はさらに見なきに

1004 しはしにもいく川のせかわたるらむ山ほとゝきす跡もおはれす

1005 やゝちりてくたけはかりになりにけりきのふ一日の花のしら雪

1006 さわかしくむれたる市（イチヒトノ）に子規行方（「き」（イチタチノマニ））をみたる人もこそあれ（ヒマモ）

1007 をしけれとはるのころもゝぬきすてつこゝを夏にかふるしるへに

1008 さゝきすむそのふのかきね春めきぬ我も垣根を行かよはゝや

1009 さむしとてそて巻こむるかたはらにひらく軒はの玉椿哉

1010 このもとの風に吹るゝかたつふりいつなきからになれるなるらん

（四二・才）」

1011 みわたせはそらにはきぬる雪もなし月かけよりや時雨ふるらむ

1012 いつこにかふりつゝき行おとはせてこのまにきゆるむらしくれ哉

1013 いつよりかそのはのもみちちりはてゝかそへやすくもなれる柿のみ

1014 よくきけはさま〳〵になくからす哉いかなるこゑかよろこひのこゑ

1015 いそのうへをはしり〳〵てむらちとりとゝまる所なけにもある哉

1016 隅川のすさきにはてし夕しくれ汀やけふのとまりなるらむ

1017 ことしけき十一月十二月とく過て俄に花の春へともかな

1018 のとかなる冬のみそらにかりかねも春待かねてゆくかとそみる

1019 見えねとも匂来かにしるき哉垣のあなたやきくの花その

1020 いろなるもなくなりにけり庭のおもにうすしこしとて拾紅葉

1021 夏もやゝ半になりて春花もいつの音にちれるなるらむ

（四二・ウ）」

1022 庭のおもはえもはらはれすなりにけりもゆるおわかすもゆるおもひに

1023 梢よりさらにも落す山風に吹きめくりきてちれるもみち葉

1024 月いつるそなたをみれはうめの花梅の花立枝のかけはねやに入まて

1025 鶯も羽うちふれて梅の花やけとやなきにけさのはつはる

1026 鶯のけさなきそひるこゑさへもまたかたなりのうめの初花

1027 なへてさく花うれしさに鶯の一所にもえやはあられぬ

1028 花により松によりきて行水もたゝますくにも流さりけり

1029 藤波の花さへ山を下りきて軒にかゝれる道のへのやと

1030 時鳥のおのかはかせにあらねともそら過行はさやく菰原

1031 浜千鳥おのかひかたのいろせなは飛立時そまかへるも見ゆ

1032 まれにたついその高波おとたえてそのまに鳴くは千鳥也けり

（四三・オ）」

1033 夏衣けさぬるかふるひまにたにことしはきなくほとゝきすかな

1034 藤波の花かけくゝる時鳥今こそ誰もそこを過しか

1035 野へ遠き一木の松に子規かけてもそこに行けしき哉

1036 よせくれはもの見車の轅にもましりて匂ふ秋はきのはな

1037 藤なみのいろのたくひと池よりも花合する杜若かな

1038 夏山のわかはのいろのふさわしく老たるいろも無子規

1039 をりさしてうち向ふより床のへにいつまてみたる白菊の花

1040 山にたにかくれはゆかて己から寒けたゝしき空の浮雲

1041 なにとなく人行かひて春めけは汀のかきりきたるうろくつ

1042 さわかしき林の音はとえしよもいとかすかにてのこるまつ風

1043 みとりなるこけの筵のうちにしもなかいろみせにちれる紅葉

（四三・ウ）」

1044 友とおもふともは此世にたえてなくわれたる硯一なりけり

1045 ひのくちの花はいくさもせぬものをあまたいたてを負すなる哉

1046 立並家のかはらのすち〳〵もけさ見えきぬる春のしらゆき

1047 神無月のとかなるひははるめけは人くといふか鶯のこゑ

1048 鶯のこのまくゝりもふさはしく夕日さしたる霜月の空

1049 夕されはたかはのうへにふるあられかすかにおとの寒くも有哉

1050 まとのとのほと〳〵となる寒けさはこもりてねよといふかとそきく

1051 畳たにゆくうちあはぬ庵の内はまともる風の寒きのみかは

1052 庭のおもになかれもゆかす潦冬はとちたる氷なりけり

1053 ゆきふるか【ましろ（うめのこする）く】をくらきにましろく見ゆる花計りして

（四四・オ）」

1054 吹風にもてゆく花と見え乍うめのかれえにとまる白ゆき

1055 きのふまていけも平に見えにしか水のおもたかさきいてにけり
1056 老ぬれはゆきふる庭にいてもあへす引かへさるゝ埋火のもと
1057 埋火のもとにゐよとの音ならむいつれは寒くさやくさゝ垣
1058 おのかとち寒き心をあはせても氷のうへをわたる川風
1059 へたてたる垣根おもはす内に外に風さへ吹はちる紅葉哉
1060 霜きえて朝月やとるけしき哉杪にわたすさをの一すち
1061 を山田の水に立ねの友鶴もさわき出たる朝日かけ哉
1062 鶯のうちはわきてや過つらむ花あらはれぬ雪の中つ枝
1063 わかやとの梢もはるはおとらしをよそまさりにも見ゆる花かな
1064 もとにゐて春をまつまもうらやすし日さへあたれるまとの埋火
（四四・ウ）」
1065 わかいほも神のいかきにゝたる哉しめ引はゆる春のはしめは

1066 けさはさは住かありとも見えぬらむ日かけさしたる松の間のまと
1067 いつこよりたねさそひきて潦なかれしあとに生る春草
1068 わかゐひもいまたこなくに入相の鐘にゆらるゝ花のさかつき
1069 風ふけはめには見えねとうめの花かさへちりかふさかりなるらむ
1070 冬こもるわか埋火のうへなれやのさはのゆきのけさはきえぬる
1071 ひま過る風のみさらて枝もなきもとさむけなる竹のむら立
1072 こゝに立かしこに立て市人もさむさにつとふ十一月のそら
1073 あたゝけきいちに入こはさしもあらし寒さにや急くのへの川水
1074 さわらひの生るをみれはきゝすさへともにあるへき庭のおも哉
1075 埋火にかきいたきてもたらぬ哉今夜の寒さすへも無まて
（四五・オ）」
1076 中々にゆめのまきれになりやらてまさにうき社世はうかれけれ

1077 かけにてはあらしかほなるけしきしていへうちこしに花の見ゆらむ

1078 水にうつるかけやいかにと見に行はそこに出てもくるさくら哉

1079 むかしよりもちつたへたる畠も田もうりくひむしはわか身也けり

1080 うたゝねのおの夢にも見えくれは花のゆめにもわれや見ゆらむ

1081 いつこにかにけかくるとはなけれともめもはなたれす守る月哉（ユクヘナクウシナフヘクハ）

1082 なにとなくのとかに見えて冬にてもまとにうつるは春日とそおもふ

1083 五月雨にもとゝするゑとは波こえてはしのなからの水に見ゆらむ

1084 こしをれて汀にたてるあしたにも【わか】すかたになれる冬かな（おのか）

1085 あしかきにいまたのこれる朝皃のみを吹おとすこからしの風

1086 をかのうへのくさのみとりにまけしとて水よりも出る池のあしのめ

（四五・ウ）」

1087 わたつみのちひろのそこのゑひたにも月もろともにうかふよは哉

1088 ますくなる心をよそに見せかほに雲に立たる杉のむら立

1089 ほともなくかゝる芭蕉の身をしめて寒かりぬへき霜月の空

1090 なにことものほの〳〵しくて老のみのいつよりゆめになるらん

1091 入かたのまとにさしたる夕日すら限はさたにさやかなる哉

1092 在明の月は半（になりたれと）傘はまとかにさしてける哉（とかけたれと）

1093 春の日にゆるへ過せるいかのをのあたゝけ過てねふるはかりそ

1094 山吹の花たに折てなくさまむいろこかねこそ手にも任せね

1095 としふれは家さへ人にひとしくて臥屋の戸口こはけなるかな

1096 いそきはにてらすひかけのゝとけさよ水を離て姿水鳥

1097 わかこゝろそひて行をもしらすして独めくれる水の浮島

（四六・オ）」

1098 埋火のもとにありてもよきものを外にたちいてゝなくわらはかな

1099 薪にもとりつきかぬるこのはさへ皆とりにけしよはの山風

1100 けさまたきおきいてかねし衾よりいつるくさめのいくたひとなき

1101 杜若へたてかましき名なれ共中わきて行水の月影

1102 ゆくせにはおこれかほなる月なれといそく水にはこゝろあはせす

1103 しもおける瓦の下をとくらにてなきいてかぬるけさのすゝめ哉（には）

1104 ねさめかはよるはすからにまとろまてかねのかすよむ臥いほの中

1105 ところせきねやの神達ましませは朝をくらしと火を奉る

1106 雨はれてあらはれいつる時来（古）はめもはなたれぬくものうちやま

1107 さやまめのうちゐたゝしきならひさまわかみのなりそくらへくるしき

1108 うゑかへはさまたかふへしうめのはなこなたよりきて庵をたてはや

1109 なにをしてなかすあるらむ鶯のなかぬまをしきうめのさかりに

（四六・ウ）」

月　樫山

1110 なにはかたしるしの山なくなりて平かならす見ゆるみ世かな

1111 いくたひかはしりとゝまるいそちとりさも行かたくむかふあらしに

1112 中々に春のはしめの物なれやあら〳〵しかるさとの歯朶垣

1113 みちのへの旅のつかれのまろひねにねふれる人を照す月影

1114 にはのおもの風にまろへる蝸牛むなしきからのかろけなる哉

1115 さくらはなちりしくやとのさやけきにたげてもあゆむ庭鳥哉

1116 あらはにてむかへるよりもあはれ也まとこしに見るうめの初花

1117 まつら川下せる船をおもしろみ竹こしにさへ見たるさと人

1118 むつましくおなしさはへにつとへともこゝろ〳〵にとふほたる哉

1119 霜にたにかれぬと見てし花のうちにみ冬は冬のきくそさきぬる

（四七・オ）」

1120 さはの水さも波たつな杜若汀にぬるゝ花もこそあれ

1121 夕まくれちる花やみねかくなからよのまものとにあらむためかも

1122 あさけよりもの静なる花さかりひるより風のたゝぬ日もかな

灌佛

ナケキテアリシマニ

1123 かくれます御歎のみ社歎しかまたうまれますけふのみ仏

1124 生いつる庭のわかたけたけたかみおほつかなくもなよけなる哉

1125 かきりとかやみにちりくる夜さくらをさもさせしとや出る月影

1126 夕されはなかるゝ花も水のいろのあさきさくらに皆なりにけり

1127 船きしのをさゝかくれに在舟を見いてかほにもちるさくらかな

1128 水もなく人も渚にちる花のかたよるこゝろをかしとそ見る

1129 夕されはころも手白くちる花のいへに行まて袖そあれかし

1130 さらにちるこゝちこそせめさくら花【水に（かぜの）】【やとれる】月のうへにうかひて

（四七・ウ）」

1131 吹風に花ちりうかふわたし舟われものせてといてぬはかりに

1132 山おろし吹にのかれて旅人のそてにかゝるゝ岸の紅葉

1133 旅人のそひらにあたる夕日かけやとるさとまて送るはかりに

1134 けふもまたわつかになりて道のうへの夕日さひしき道芝の影

1135 ちりうする庭のこのはのかた〳〵に行へかなしくなるわかれ哉

1136 もえ乍すゝしきものはさはくさにすかる蛍のほかけ也けり

1137 水かゝるみ冬のするゑになりぬれは川のうちにて川なかれけり

1138 もみちをはまろはしちらし庭のおもに独楽むこからしの風

1139 こゝよしとけさより【けさ】（し）めしこの根をありかへてみる夕くれの花

1140 日はくれぬ今はねはやといふまてはすかの長ねの及はるかは

（四八・オ）」

1141 下さむく軒はの雨のおとするや雪ふりくへきさきおひのこゑ

1142 かれはてゝ見へくもあらぬ葛にもこほれのこれる朝かほのたね

1143 かへる雁かへる〳〵と触れかほにわひしく鳴を聞旅人かな

1144 をちこちに飛めくりきていつも〳〵こゝにとまれる斑鳩のさと

1145 出きぬとおもひもあへすいよすたれかゝけたらすも昇る月哉

1146 花をみる人にたくへてこし犬もかへるさしらぬ陰のうたゝね

1147 谷こしのそなたに見ゆる家をしもとなりかましくいへる山さと

1148 山さとの中々おほき家を見ていかてかよふとおもふ谷道

1149 そこも松爰もまつなる松山に木を切るおとは人けありけり

1150 立波にやかたも人もかくるらむほ計見ゆる沖のとも船

1151 五月雨もやゝ晴かたになりつらむ水をいてくる谷の川はし

1152 鳥たにも夕けの時になりつらむこゑはしりたるむらすゝめかな

（四八・ウ）」

1153 手にちかきさえたをさへに折かねてをしむ心のしるき梅哉

1154 をりつれてゑまひにしるく見ゆる哉われを恨ぬ花のこゝろは

1155 うめかゝにそひてわかゆくなはてをはおのれも追てくる野風哉

1156 ふく風をとさまにやりて竹垣のもとかくれにもこもるうめかゝ

1157 都大路花はこなたにおかましをちりと一にやるあらしかな

1158 人のみかおのか身しらて鶯のなにをねらへるこのまなるなむ

1159 まつにうめうつろひかねてわかことくとなりありきの園の鶯

1160 鶯の籔をなくはかり行かひておりたすものはうめの花あや

1161 竹垣のうちにこもりて春風を外さまに過すそのゝうめかゝ

1162 春の風またのとけくも無物をさきいたちても匂ふうめかゝ

1163 ふき昇るみなとのあらしゝけゝれと風にもつれぬ川のな引藻

1164 人しれすまさこの下に今もりてさてありぬへきつく〳〵しかは

（四九・才）」

1165 山寺のみちの長手のとほけれは中々かねのこゑそみしかき

1166 冬くれはこすゑのあらしあらひきてひよなき過るさとのやのむね

1167 何ことゝとへは答す少女ともみなまていはてわらふなる哉

1168 潦水わつかに過るにはにたにうちたれてきてさけるうめか枝

1169 さく花に立居ふるまひうれしさはおのれのみかと見ゆる鶯

1170 はるかにも影みえなからうち群てかすみのうへをかへるひよとり

1171 あまた人下るも見えてさき坂の下にやとかるたそかれのさと

1172 谷あひのみかたのさとのせまきにもいてくる月のおもひろけなる

1173 はかたへと帆をむけかへつやらかさきのこの尾はなを廻る友舟

1174 ほすゑにて三葉四葉を篠さゝもゆきにたわめるけさのあけほの

1175 あなたよりめつるのみかは梅かゝにこなたよりこそこゝろしみけれ

1176 冬こもるまとのうちにも昏こしに庭の夕日のてれるをそしる

（四九・ウ）」

1177 居並へる夕けの時にうちむれておのれもさわくにはすゝめかな

1178 けふもまたねやの机はひとりゐてはなれぬものは【ねやの】埋火のもと

1179 花とへはまた外になし中垣の柱にゆへるうめの一木のみ

1180 われほめもきゝくるしかるものなれとやとの桜にます花そなき

1181 わかやとに月も入きぬ子規さとはつれのみかよふへしやは

1182 くさのはの葉すゑにおける露の玉落てもよしと身をやさためし

1183 草の露水のあわともかそへきて今一なるあたものやなに

1184 雲かくれ山のは隠れ軒はにもかくれましやにしに月哉

1185 うたゝねの枕にかをる梅かゝはゆめのうちにもうつゝなりけり

1186 折々は月もこなたやみまほしき雲のひまよりのそくなる哉

1187 う治山のこのめつき木の花さかりめをつむよりは折てさゝはや

（五〇・才）」

1188 かす〳〵のかすみのうへのいかのほりたかいつこより引てあるらむ

1189 誰人（タモトヨリ）かとりはなちたるものかほにあかる〳〵となくひはりかな

1190 この朝けしつかにきけは遠方ははるになりたるうくひすのこゑ

1191 一本に三葉四葉のましのさへまねきかほにもなひく秋風

1192 はるなれや花はしりゆくみをもあはれはめくりてはてぬふちもありけり

1193 誰もみな夕けの時になりにけりすゝめもあさる夕陰のには

1194 初はるはかみのいかきにことならてしりしめ縄のいさきよきかな

1195 なか〳〵に今こそうめはましろけれやとのすみ〳〵くらしなれゝと

1196 けふのひも今はかきりと夕付日花やかにさすにはのくれたけ（マト）

1197 水のうへにちりぬるうめのくたけては一のこらぬもとの花形

1198 いつよりかゝきくらしつゝふりかねてくもおもけなるゆふたちの空

1199 ねやにもる雨のおとこそしつかなれ軒のしくれはふりさわけとも

（五〇・ウ）」

1200 皆人はみないこはせてたにまのゝはしをわたせるむらさめのそら

1201 かとすくる人のころもて雪ちりてとしの終のけしき立けり

1202 うめみれはそのふははるになりにけり人のいへのみしはすにはして

1203 ことしけきとしの終は埋火の己独やあたゝまるらむ

1204 老ぬれはなす事なきかさひしくてせは〳〵しくもあるそうれしき

1205 なゝそちになるよとおもふうれしさにことしは年の情けくもなし
1206 としのかすかそふるほとはたかはねとまたなゝそちのこゝちこそせね
1207 いろつきし葉はみなちりて山柿の枝のもみちは実に社ありけれ
1208 こゝろして堪てもあらめと長夜をうめの立枝にわたる山風
1209 夕まくれみ谷のそこや寒からし雲に飛入ひよとりのこゑ
1210 花おちてうちかさなれる深み草そらにちらねとけしきありけり
1211 冬のきてけしきそひゆく夕まくれやの棟こゆるひよとりのこゑ
（五一・才）」
1212 いつよりかふゝめる軒の下椿うめよりもけに早さきにけり
1213 のとかなるひにもいてこて垣内のはやかたまれるにはたゝきかな
1214 ゆきの内に花さき出るうめをみてわか身やさしき埋火のもと
1215 さくらはなうかれ〳〵てちる比は風もたのしく吹けしきかな

1216 いくたひかゝとうち過て平ならすそよかへりくる妹かくつ音
1217 ちまち田のおほろ月夜に立鶴の影のとかなる夕くれの空
1218 しはしあはれさはかりもなき寒さにもえもおきかぬる霜の朝とこ
1219 さくらさくみねを飛行しらくものこゝろなしにて山田をいてめや
1220 をかのうへにけふはいてきておもふとちめを心にも任せつるかな
1221 水のこゑやゝきゝいてゝうれしきは【花や】谷まの氷とけし也けり（クル）
1222 よの中にちりもわか身もかはらねはころめらるへき理そかし
1223 なにことそさしてのいその底たゝきたゝき乍やもの見かほなる
1224 かけ乍猶のこりたる硯こそ半しにたるわか身なりけれ
（五一・ウ）」
1225 鶯の仰乍に見るかたやわれもさくへくおもふうめか枝

1226 わかまたるうめさへいまたさかすしていつかたばらむとしのもち飯

1227 行としのくれさむけなるさひしさをさきて補ふ軒のうめかゝ

1228 こゝろなき花なれはこそ皆人のひたおもてにもほめにほめけれ

1229 山さとはしはすのはてになりつらむとしの尾越のひよとりのこゑ

1230 花さけはさへてなくねのおもしろみ冬にかはれる春のひよとり

1231 いつまてもふゝめるうめのさひしきにもとにゝほゝるあから立花

1232 瀧のおとに春きにけりとおとろけは汀のうめもほゝろひにけり

1233 うめたにもおとろきさける瀧のおとを我のみ春をしるかとおもひし

1234 瀧の音のいと大こゑにきこゆるは遠き郷まて春やつくらむ

1235 かせふけは風にもまろふ蝸牛いつなきからになれるなるらむ

1236 水せまき壺のうちにもうめの花いつ影うつす一枝なるらむ

1237 中々にとこ離るゝやよろしきとしひても起る霜のあかつき

（五二・才）」

1238 よすからのしもにふちとる草のはの【寒さ】もいとしるき此朝けかな

1239 老のみはこよひもしもとしるものを庭あたゝけにさす夕日かな

1240 あらをにか手をあはせてもいたくへき松にもすめる鶯のこゑ

1241 鶯もすかりすめるやおもしろき風に乱るゝあをやきのいと

1242 くもゐより俄におつる夕ひはりすこもる子をや思いつらむ

1243 ちはらより俄にたちてなくひはりすたてる子社そらに呼らし

1244 川のおもに夕日さす也わたし船わたせる人もあかきはかりに

1245 かす〳〵にのこるつほみを頼にてやすくも落る玉つはき哉

1246 わらはゝのそてをひろけてまつまにもおちかゝるへき玉椿哉

1247 きの山のそなたや春になりぬらむ年のをこしのひよとりのこゑ

山田屋順之助かみまかりけるにつかはしける

このうたをもたせてつかはすとか

（五二・ウ）」

1248 霜きえて露のこゝろの置所則はすのうてな也けり（ミタマノ）

徳宗志里子の一周忌に

1249 わかれてはまた立帰る時もなし天の日にたに【立帰ら】はや（メクリアハ）

1250 かはかりの蒼のかすに梅花一花さかていくか見すらむ

1251 灯してこするをみはやさくらはな人にしらさす独るむかと

1252 さと中もくらくなりきて山のはをたゝには見ねとをしき月影

1253 山人も花はきらしと思へともこゝろもとなき斧の音かな

1254 おのれから移ふころになりぬるを折取ちると見ゆる花哉

1255 いつのまに垣まをこして春の水うめかけうつるにはにきつらむ

1256 むかしより垣の境もなかりけりとなりの松そわかやとの松

1257 皆人にさかはやらむと契置て一枝もをらぬ花さかり哉

1258 おもはすも早きとし哉桃たにも三月三日にはあふくもなく

1259 埋火にねふれるまにや降雪の雨になりぬる夕くれの空

（五三・オ）」

1260 たのしらにもろ手のもたる親子狙そのこのみこそこのましけなれ

1261 道のへにはらからめきて土筆長きみしかき立ならふなる

1262 すかりゐて花の芯はむひよとりにやかても落る野椿のはな

1263 芭蕉はのひろはやことに寒からむ身をせはめたるけさの秋風

1264 無人のこのみなりつる丹波栗少け乍奉らはや

1265 見つゝのみ立たる人も折ぬへし手ちかくもよる青やきのいと

1266 青柳のいとのけしきをやゝそへて己もなひくかけの駒の毛

1267 武士のちからかましきたもとには中々をらし青柳のいと

1268 あらためてなかれそめつと見ゆる哉春の始めの谷のわか水

1269 山のはにかくるゝ時は入月もさらはといへるこゝちこそすれ

1270 かしらしてまねく烏のこゑはいてす友ほしけなる夕くれの空

1271 いつよりかそらなる月はやとるらむたかふたとりし水瓶の中

1272 ゆきふれはうれしかほなるゑせいぬの己か跡つくにはゝしらすて

（五三・ウ）」

1273 はるくれはわかなわか水けしき相て川へのやとのなつかしきかな

1274 池のうへにかつちりうきてさくらはななかれぬ水のくちをしき哉

1275 月かけは爰まてさへに入ものを昏の一重にとむるまとかな

1276 なくたひに遠さかり行子規ちかつくこゑに引かへしてよ

1277 をかのへの松一もとを庭木にていくらの庵か並ふ今さと

岡半三郎　養子□　きたりける時竹の子にそへて

1278 今よりはをかのたかむら君しめて生る子毎にちよはたかはし

滞花

1279 見つゝ【ゆく】人さへし　は　しとゝむなり花滞る川の岸杭

クル　ツゝミノ人トモロ共ニトマリテユカヌ　キシクヒノハナ

暮春

1280 はるくれてさひしきけふはちる花も隣にたにと行けしきかな

山吹

1281 をりさせるたゝ一枝も川きしにさくすかたなる山吹のはな

山彦

1282 【かたりあひて谷路を過る】こゑをさへまねひかほにもとよむ山彦

暮春

1283 ゆくはるをとほくもおはてこの元にちれるさくらのつかねをそ見る

（五四・オ）」

1284 こゝろなく水に任てなかれ行川せは花のゆめち也けり

1285 夕くれもいそきめくらぬ水車よるひるなしの水に任て

1286 見つゝゆく堤の人ともろともに己もとまるきしくひの花

1287 五月雨もけふはまことにはれぬ也ひてり雨ふる山もとのさと

1288 夏山のてらはまひろしあつしとて身にたへかたき日はなかりけり

1289 何人にあふちのかけそすゝしくて花ちりしきてまちかほにする

1290 よひ〳〵のけふりにむする郷中にいつまてたくそむろの木積は

1291 翁ふることもなくして山松のおのつからなるすかたかなしき

1292 とし〳〵におなしさまには立乍ことさらひたるにはのわかたけ

1293 そこよりと行たるもなく今朝見れは山はのこらすかすみきにけり

1294 うくひすのけさはつこゑのうれしきにまちかきにさゝおとろかれけり

1295 臥いほのところせけなる入口にところせけなし桐の一葉哉

1296 花にゐてねふるさまなるこてふかなゆめかとみつるなてしこのはな

1297 風ふきてよりつきかたきこてふかな花さへなひくにはのさゆりは

（五四・ウ）」

1298 さま〳〵にいろかはれとも誰か見む人なきてらにさけるあちさゐ

1299 行こまのすゝふりたてゝ追行とあとかへり見ぬほとゝきす哉

1300 雨になるくものけしきをしりかほにいそくなはての子規かな

1301 たかくのひてすかたかましきけしの花早くちるこそおのか痕なれ

1302 こゑはかりきけはやみなき子規行へたつねすあるへかりけり

1303 誰ならむあらし〳〵てすみすてしあとに盛の夕かほのはな

1304 はるの水いかにのとかになりつらむおもけにめくる水くるまかな

1305 夕くれの入日に見れは【やゝとほく】おきまて引るいそのしまかけ

1306 おのれから思ふ所にいつも〳〵くものそひたる夏山のみね

1307 夏くれは水なつかしきはしめとて花もそへたるかきつはたかな

1308 にはとりのいつもおやこのとちあそひかきみたりる花紅葉哉

1309 はる秋のすきはひしれぬ小家にも一木はもたる軒の花かな

1310 こゑなしにかきねにきゐる鶯の今はとはるをおもひすてけむ

1311 はるの花さきたるおなしこゝろもてわかはにしける夏木立かな

（五五・オ）」

1312 竹のはのしけき中にも月かけのかけぬすかたは見ゆるよはかな

1313 すゝしさに月をみるとか夕まくれ枕なけこむ川そひの舟

1314 たゝにゆく人も見ゆれとてる月のもそろ〳〵にわたる川【舟】（はし）

1315 いつのよもこゝろの外に更にけりこはてる月のしわさ也けり

1316 すゝしやとおもふ迄こそすゝしけれ今はねふたさかきり無哉

1317 水音に川かぜましるすゝしさをいかてつゝみてねやに入南

1318 一むらのくもにこめたるすゝしさを【ゝし】（はや）くも【早く】（よそに）やるあらし哉

1319 あすよりはけにすゝしくもなるらめと夏のかきりの夕くれのかせ

1320 村雨はこゝろありてもふりこかしちりをかつけるなてしこの花

1321 雨ふらは風もすゝしくいらましをあつさにふさくまつのまのまと

1322 いねかねてかたるこゑするよなかゝなとなりもおなしよはの暑さに

1323 やねこしに入【舟】（クル）見えて舟のほのいくつとなしや深川のさと

1324 あさちはらすゝしき風に任せては人のかとまて払ふ夕【風】（くれ）

（五五・ウ）」

1325 うゑ木うる夕くれ方のいち人もすゝみかてらの夕まくれかな

1326 うるといはゝいかなる人かゝはさらむこけのしみつも庭にありけり

1327 夏のゝゝ草木しなふる道のへにあつさもしらすゝむしみつかな

1328 みちのへのしみつかもとに人むれてあさちかうへの脱すてのかさ

1329 よあくれはましろになれるくものみねあかつきのみの山にそありける

1330 なみくらのと【を（ことに）】あけ【は】て【ゝかりの】市にたに夕風入る【なにはへの（ゆふまくれ）市（哉）】

1331 みちのへに乱生たる松たにもならへはものゝ清けなる哉

1332 おのかしゝはちきものけす【みちのへ（このもと）】のひちにまみるゝ萩の下枝

1333 花ちれはあけはなちたる門をさへ人も入こぬみちのへのいほ

1334 くものみね一木の松のそなたより人しれぬまに立そうかへる

1335 見わたせは雨はれそむる白くものそこはしりたるのへの夏川

1336 わかゝとにありかをひろくとるものはさもいとたるゝ柳也けり

（五六・才）」

1337 老ほれて半しにたるはたにたに蚊遣いとひてけふり立けり

1338 すゝしさも今はおほえて川きしに舟まつ人の見るあふちかな

1339 なつなつみせりつみ行つく〳〵しなれもともにといひかほに立

1340 はるかなるすさきに立てみをつくし【そら（風）】長閑なる二月のそら

1341 むらからすいつれか子ともわかねともはまするゑにそ親は見えける

1342 すかりてもあるかとみれはなくせみの所かへこそうたてしゝけれ

1343 朝々のへあらたなる朝かすみはらへるそらと誰も見るまて

1344 たかむらのすくなるうちに見くらへてわたる間こそいとめたちけれ

1345 このもとはいまたひるなるさくら哉人かへりてやよるになるなる

1346 こゝよりやさして行へきわかやとの花よりつゝくをちの遠山

1347 風ふけはまねき〳〵てみちのへに夫のみおのかわさすゝき哉

1348 われさへにきかしとすれと春のよのみしかよ乍ねこのよあかし

1349 行かたに過よみそらの子規わかめのまへをとひかふへくは

（五六・ウ）」

1350 人ゆけははしりにけたるあしかにの過れはあとにまたいてぬへし

1351 わかけれはもの速かにはにひしこゝろもにふき老のはてかな

1352 かれ〳〵ての路にふしたる枯尾花月にはなるゝこともしらすて

1353 民の家の麦かりほせるさと中に蛍見にとて人そきませる

1354 行かよふわらはもをらてさと中にあちさいさける竹ひさし哉

1355 ほとゝきすわすれてもあし夏山のわかはやはらに生しけるころ

1356 市中のしなけもなしのうりかひをやはらけてなくほとゝきす哉

1357 よの人の下やすからぬこゝろをは水鳥のみとおもひける哉

1358 きけや人むかしまれなる齢してしぬへくおもふ時こそありけれ

1359 老ぬれはなれしさかつきはにふれてみつのともなき一つたになし

1360 のとかなるけしきのうちそめつらしく山やくけしき見ゆる夕くれ

1361 ほとゝきすまつやとるらむならひたるわかはのかけの数のわらくつ

1362 てる月のかけはいつこもてるものを独さひしく見ゆるそらかな

（五七・オ）」

1363 けさのたちあなちになりぬこゝちよくみねのわかはゝぬれ〳〵にして

1364 暮山花　十三回

皆人のさらはと立もすかたのみ帰ると見ゆる花の夕陰

1365 なにとなく君おもひいて夕くれの山路の花にしのふ比哉

1366 過るもの皆なつかしなとほさかる一村くもはむかしならねと

1367 七十賀

みしかよにねこのよありきかしましく人さへねせぬ夏のこのころ

1368 世の中をすてゝはあれとねふたくてゐてもえあらぬ六月のころ

1369 あるしする人には何もいはすしてまつ見る軒の家さくらかな

1370 口ひらく夕くれからすあつき日はねにかへるまもそらやくるしき

1371 かへるさになりてめにつく土筆尋し野にはなか〳〵になく

1372 大路行こゝろもかけになりはてゝ夕日に向ふ夏のくれかた

1373 秋くさのところ〳〵にさきしより道をまけても行野中かな

1374 世の中をこゝろのまゝに行ものは野への川せのしみつ也けり

（五七・ウ）」

1375 秋ふかくなり行まゝに見わたしの皆山さとは枯尾花して

1376 川舟のもそろ〳〵に北吹てけふはすゝしと誰もいふなり

1377 さきぬれはうけかゝになる山さとは小いへ毎にも入て見る哉

1378 くれ行はくれ行けしきまたことにさひしさ増る秋雨哉

1379 くらやみにやすくもいそく子規なくねのことやめさへさやけき

1380 うらさとのけしきかはりてあしのはにたえ〳〵見ゆる夏はきにけり

1381 をり〳〵にうこくやみぬる青柳は長きはるひにねふる也けり

1382 まさやかにすかた見せぬる冨士のねのけふや夏立はしめなるらん

1383 すゝめに子おやにかはらすなりぬれとまたしきすかた猶のこりけり

1384 をちこちの人のつとひか朝夕にまとよりをちの見ゆるをちかた

1385 汐みくさふかくそめにし心にやちれとも花の手折かてなる

1386 夏くれはこたちわけゆく旅人の袖のまに〳〵なるわらはかな

1387 花のみねさやに見えきぬわかかさの雨のしたゝりやむをまつまに

（五八・才）」

1388 大そらのくもの行きにめをやりてをしむさくらをよそにする哉

1389 ひさにもる月にちりくるさくらはないつれもうとくそむけるはなし

1390 このもとに花かけにしはしとゝむる少女さへ花のつかひにことならぬ哉

1391 人のきくこともおもはてなくかはすけにむるゝ夕くれのそら

1392 にはたつみなかるはかりの小流にわきて覆へる山吹のはな

1393 花にものいはむとおもへはいひかねてともにゐまるゝにはさくら哉

1394 あらかきのちまとせはむる萩の花さかりは人のこぬもよしとか

1395 かりさりてしはしはさむしをたの月かたみにむかふよは斗して

1396 花はかりうとき隣をしり〳〵てにしに東にゆける枝哉

1397 大かたはねたるかほにてさく花にねふるもあらすゐたる蝶かな

1398 立さらはふまゝしものをあさちはらあまりにちかくゐゝひはり哉

1399 ふすほりておくくらけなる仏にもさやに匂ふ花の枝哉

1400 きくの花皆一時にさかすともかつ〳〵ふゝみひらく見せなむ

1401 山鳩のたゝ一つかひ枝にゐてさひしかほなる秋の夕くれ

「天理図書館蔵」印

（五八・ウ）」

付記

本稿の資料閲覧、および翻刻については、天理大学附属図書館に御許可を賜った。
ここに深甚の謝意を表する次第である。（凡例は、４６号参照。）

（しんとう　やすこ・九州情報大学非常勤講師）